Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-08

フランス語の綴りと発音への気づきを促す自律学習プログラムのデザインとその効果について

廣田，大地

(Citation)
神戸大学国際コミュニケーションセンター論集,17:75-84

(Issue Date)
2021-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012586

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012586

『神戸大学大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター論集』17 号（2021 年 3 月）
Journal of the School of Languages and Communication, Kobe University, Vol. 17 (March, 2021)
NCID=AA12182319

フランス語の綴りと発音への気づきを促す
自律学習プログラムのデザインとその効果について

廣田　大地
神戸大学 大学教育推進機構 国際コミュニケーションセンター

Design of an autonomous learning program to raise awareness about the correspondence between spelling and pronunciation for French learners and its effects

HIROTA, Daichi
Kobe University, IPHE, SOLAC

概要

本研究は，フランス語初修者が自律的に綴りと発音の対応関係に関する気づきを得ることで発音を向上させることを可能にする学習プログラムを開発するための第一歩として，学習プログラムの工程を試作し，その工程のなかで学習者の能動的な自己分析が発音の向上に関与しているのかを調査した。その方法として，学習者がおこなう自己分析と発音スコアの増加との間に相関関係があるかを分析し，約 0.4 のゆるやかな正の相関があることが明らかになった。

キーワード

フランス語，自律学習，綴りと発音

1. はじめに

近年，音声学の発展にともない，フランス語教育学の分野でも音声学の知見を活用した発音指導方法の研究が盛んにおこなわれるようになった。外国語学習における発音の重要性についてはあらためて指摘するまでもないが，日本におけるフランス語教育においても同様に，学習の初期から正しい発音を習得することが重要であるという認識が多くの教育者・研究者によって共有されているだろう。

しかしながら，正しい発音を習得するためには，聴き取りと発声に関する訓練を繰り返しおこなう必要があり，そのためには多大な時間と労力が必要となる。また，教師は学習者に対して，模範となる音声を聴かせたり，発声を聴き評価したりする必要があり，教師の側の労力も少なくはない。と

りわけ，2020 年度のように何らかの事情により対面式の授業が困難となり，インターネットを利用したビデオ会議システムによる遠隔授業をおこなわなければならなくなった際には，大学などの教育機関におけるフランス語発音指導はよりいっそう手間のかかるものとなってしまうだろう。とはいえ，実際の教育現場では，発音だけを教え続けるわけにもいかず，たとえば多くの大学では 1 年間の必修科目としての学習期間のうち，はじめの 2･3 回のみを発音の学習にあて，あとは文法や会話表現の学習に移ってしまうのが現状である。また，発音の習得は学習者間で差が出やすい傾向にあり，大学などでの大人数のクラスの授業では，まだ理解が不十分である一部の学習者のために発音学習の時間を繰り返し割くことが難しいという問題もある。

本論では，上記のような日本のフランス語教育現場の状況を考慮し，またこれまでの発音指導方法の研究を活用し，授業外の時間において，学習者が自律的にフランス語の発音を習得できるような学習プログラムを確立するための準備となるような調査をおこない，その結果について分析・考察をおこなうこととする。

また，本論において重視したいのが，フランス語における綴りと発音の対応関係である。フランス語の学習は，特に初期段階においては，文字を介さず完全に音声のみによる話し言葉として学習を進めることも不可能ではない。実際，フランス語母語話者による授業ではそのような方法が採られることもある。しかしながら，学習者が中級・上級レベルへと進んでいくためには，音声としての言語と文字としての言語を行き来できるようになることが必須であり，また，教科書・参考書・問題集といったテキストを活用した自律学習の効果を高めるためにも，学習者が学習の早期において「綴りと発音」の対応関係を正しく理解することが必要であるだろう。

2. 先行研究

日本のフランス語教育における発音指導方法の研究としては，菊池歌子によるものが比較的よく知られている（菊池 2013a，2013b など）。また，一般書としても，阿南(2006)，菊地・山根(2010)，菊池(2014)など，フランス語の発音学習・指導に特化したものが複数出版されている。また，比較的近年の発音に関する論考としては，Sauzedde(2014)や田口亜紀(2018)を挙げることができる。これらの先行研究において共通しているのは，唇・舌・口腔などのポジションを場合によっては図を用いつつ示し，音声学的な観点からフランス語の各音素の発音を分析するという点である。また，日本人学習者にとって特に習得が困難であるとされるフランス語の母音の発音に焦点が当てられていることも共通点となっている。その点では，上述の菊池を中心に開発されたフランス語の『母音練習ソフト』（2021 年 2 月 20 日現在 http://www.arcadia.co.jp/products/sonicprint#index022 からダウンロード可能）も同様の傾向にある。

しかしながら，実際の教育現場においては，1 年間の学習を終えつつある学習者がいまだにフランス語の発音の基礎を理解していないという状況に出くわすことが少なくない。たとえば，「語末の子音は読まない」「語末の e は読まない」「ch は/ɡ/ではなく/ʃ/と読む」といったごくごく基礎的な綴りと発音の対応関係を身に付けていない学習者がどのクラスにも一定数は残ってしまっている。ただしクラスの過半数の学習者にとっては既に自明のこととなっているため，授業時間を利用したアクテ

ィビティとして，これら基本事項の習得訓練をおこなうことは難しい。そのためにも，授業外の自律的学習によって，フランス語の綴りと発音の対応関係を習得できるような仕組みを確立する必要があると考えられる。

その際に重要となるのが，学習者による「気づき」である。基礎的な綴りと発音の対応関係が身についていない学習者も，知識としてはそのことを一度授業で学習していることになる。つまり，学習した知識を具体的にどの単語のどの綴り字に対して適用させるべきなのかということを自主的に考える経験が乏しいために，正しい発音で綴りを読むことができていないと推測される。先行研究においても，井上(2014)では「発音の下位群と比べて，上位群は「発音についての規則を勉強する」と「自分の発音を録音して自己評価する」という 2 つの発音学習ストラテジーをより多く使っている傾向が示された」とし，発音習得のためには学習者が自らの発音に意識的になることが重要であるということが指摘されている。また，余語(2017)では，「発音学習に際しては（中略）学習者たちの「気づき」を活かすことが理想的である」とし，同じく学習者が自らの発音に綴りと発音の規則を適用させる必要性に「気づく」ことが重要であると指摘している。

3. リサーチデザイン

以上のような現状認識と先行研究の概観にもとづき，本研究ではフランス語初修者が自律的に（つまり教師の介在無しで自分一人で），フランス語の綴りと発音の対応関係に関する気づきを得ることで，フランス語の発音を向上させることができるような学習プログラムを設計することを最終的な目標とする。自律学習プログラムとして，今回，表 1 のような工程を考案した。

表 1　自律学習プログラムの工程案

工程 1	指定された一定数のフランス語単語を発音し，それを録音する。
工程 2	録音した自分の音声と模範音声を聴き比べる。
工程 3	自分のフランス語発音を「○・△・×」の 3 段階で自己評価する。
工程 4	単語の綴り字のうち，自分が間違えて発音していたと思われる部分に印を付ける。
工程 5	正しく発音するために必要な綴りと発音の規則を探し，その番号を記入する。
工程 6	自己分析した結果をもとにもう一度同じフランス語の単語を発音し，それを録音する。

工程 2 で用いる模範音声には，人工音声やネイティブによる音声などを教員側で用意しておく必要がある。また，工程 5 において学習者が参照する綴りと発音の規則は，授業の教科書冒頭にある発音の解説など，学習者がそれまでの学習において既に利用してきたものを使うこととする。

以上のような工程を経ることによって，学習者は否が応でも自らの発音の誤りを発見することになり，さらには綴りと発音の対応関係を適用させることで正しいフランス語の発音に近づくことができるということに気づきを得られると推測される。しかし，ただ単に模範音声を聴かせただけでも 1 回目と比較して 2 回目の発音が向上すると考えられるため，学習者の主体的な気づきが発音の向上に結び付くのかどうかを実験によって確認する必要があるだろう。

3.1 研究目的

表 1 において提示したような自律学習プログラムにおいて，フランス語の綴りと発音に関する学習者の気づきが実際に正しい発音の習得へと結び付いているかどうかを調べることを今回の研究目的とする。

3.2 データ

執筆者が 2020 年度前期に担当したフランス語初級クラス 4 クラス（地方国立大学，文系学部 2 クラス・理系学部 2 クラス）において，表 1 で示した自律学習プログラムの工程に基づいた課題を出し，履修生が提出した課題結果をデータとした。ただし，本研究において課題結果をデータとして使用することについて各履修生に確認をし，承諾を得られた履修生の課題結果のみをデータとして用いることとする。課題の実施時期は，6 月の終わりから 7 月の初めにかけてであり，この時期，各履修者はすでに前期の授業の半分を終え，綴りと発音についてもある程度の知識と経験を得ていると考えられる。

工程 1 と 6 の録音は，各履修生の所持するスマートフォンまたはパソコンでおこない，「m4a」または「mp3」の形式で提出することとした。また，工程 1 と 6 で発音する単語は，初級レベルの基本単語で単音節の名詞のみとし，「fils」「femme」「bus」「est」「sud」といった綴りと発音の対応関係からは逸脱するものを除外した。また「母音」「子音＋母音」「母音＋子音」「子音＋母音＋子音」のものを中心とし，最大でも「子音＋子音＋母音＋子音」「子音＋母音＋子音＋子音」あるいは「子音＋半母音＋母音＋子音」のような 4 音節までの単語とした。ただし「arbre」のように「母音＋子音＋子音＋子音」となり発音の難易度が高いものは除外している。

表 2 発音の対象とした 10 単語×5 セットの一覧

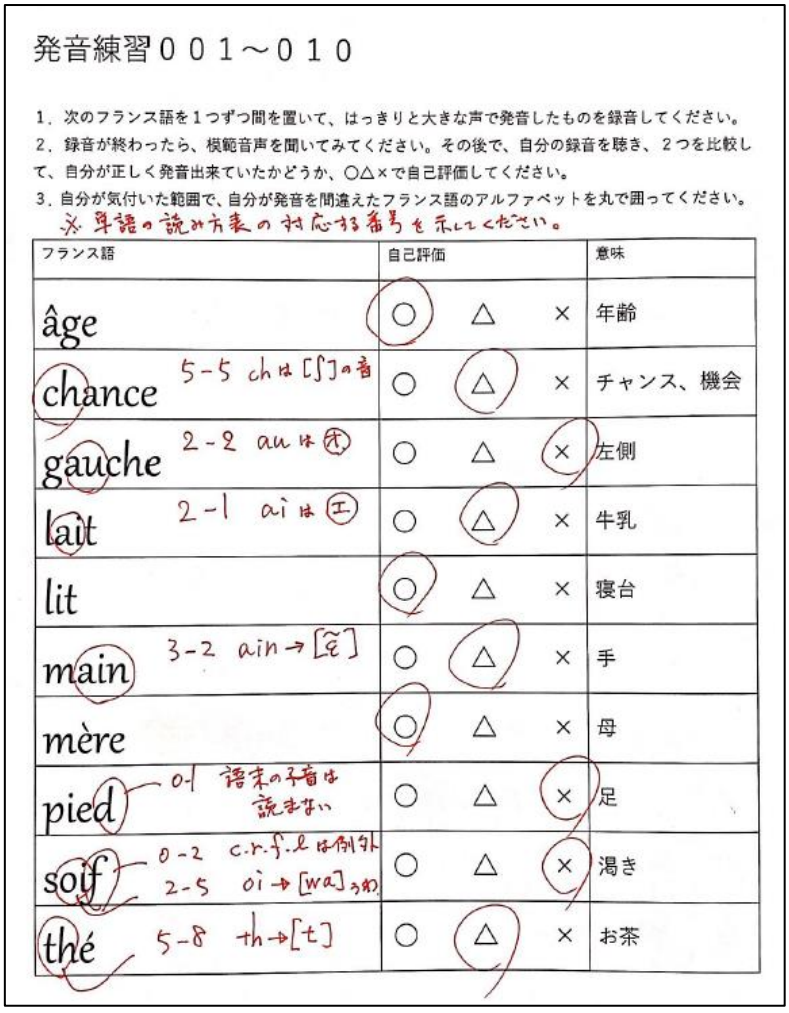
第 1 セット	第 2 セット	第 3 セット	第 4 セット	第 5 セット
âge	carte	chose	an	chaise
chance	fleur	eau	chat	dame
gauche	gare	lune	mai	faim
lait	jambe	monde	mois	fille
lit	jour	neige	nord	heure
main	mer	père	pomme	jupe
mère	mot	porte	salle	nuit
pied	nom	sac	soeur	poste
soif	pain	soir	table	sport
thé	tête	temps	vin	vent

学部 3 回生 1 名を対象とした事前調査により，一度にまとめて発音する単語が多すぎると途中

で学習者の集中力が低下する可能性があることが分かったので，発音する単語の分量は 1 セットで 10 単語とした。同じような工程を反復することにより，学習者が理解を深められるよう，合計 5 セットを作成し，一つのセットの中に同じ子音や母音の発音を含む単語が繰り返さないように分散させて，各セットの単語を決定した。今回使用した単語セットは上記の表 2 のとおりになる。

工程 2 で聴き比べてもらう模範音声には，執筆者がフランス語語彙学習 WEB ページ「フラ単」において用いている人工音声を，各セットの単語の並び順に合わせて連結しなおし，間隔をあけて 10 単語の発音を収録したファイルを 5 セット分用意した。

工程 3･4･5 で記入をおこなう課題プリントは，次の図 1 のようになる。これと同一の様式で 5 セット分を A4 用紙サイズ 5 枚で作成し，PDF 形式で保存したものを各履修者にダウンロードしてもらい，それを印刷して課題を実施してもらった。図 1 における赤字は，各履修者が課題として記入する内容を具体的にイメージしやすいように，執筆者が本稿を作成するために記入したものであり，各履修者にはこのような記入例はまったく見せていない。



発音練習００１～０１０

1．次のフランス語を１つずつ間を置いて、はっきりと大きな声で発音したものを録音してください。
2．録音が終わったら、模範音声を聞いてみてください。その後で、自分の録音を聴き、２つを比較して、自分が正しく発音出来ていたかどうか、○△×で自己評価してください。
3．自分が気付いた範囲で、自分が発音を間違えたフランス語のアルファベットを丸で囲ってください。
※単語の読み方表の対応する番号を示してください。

フランス語	自己評価			意味
âge	○	△	×	年齢
chance 5-5 ch は [ʃ] の音	○	△	×	チャンス、機会
gauche 2-2 au は オ	○	△	×	左側
lait 2-1 ai は エ	○	△	×	牛乳
lit	○	△	×	寝台
main 3-2 ain → [ɛ̃]	○	△	×	手
mère	○	△	×	母
pied 0-1 語末の子音は読まない	○	△	×	足
soif 0-2 c.r.f.l は例外 2-5 oi → [wa] ワ	○	△	×	渇き
thé 5-8 th → [t]	○	△	×	お茶

図1　課題プリント

工程 5 で学習者が参照する綴りと発音の対応に関する規則は，実際に各クラスで用いた教科書（清岡 2016）にある説明を元にして若干の改変をおこない，課題実施時に対応する項目を記すことができるように各項目にナンバリングを追加した。項目は 0-0 から 5-9 まであるが，その一部を下記の図 2 に示す。

詳しい解説：単語の読みかた

Part 0. 特に注意すべき「発音しない」つづり字

0-0. いちばん重要な発音の決まりは次のこと：**基本的には「ローマ字読み」**！

0-1. 語末の子音字は発音しない（ex. restaurant）

0-2. ただし c, r, f, l が語末にくる場合、発音することが多い（ex. chef）※「careful の子音字に注意」と覚える。

0-3. 語末の e は発音しない（ex. madame）

0-4. h は発音しない（ex. hôtel）

Part 1. 母音字（a, i, u, e, o, y）が単独の場合の読みかた

1-1. a, à, â ⇒ [a]または[ɑ]の音で読む（ex. ami ⇒ [ami], âge ⇒ [ɑʒ]）

1-2. e ⇒ [e]または[ɛ]の音で読む（※後に記す例外も多い）（ex. merci ⇒ [mɛrsi]）

1-3. é, è, ê ⇒ [e]または[ɛ]の音で読む（※例外なし）（ex. été ⇒ [ete], mère ⇒ [mɛr]）

図 2 綴りと発音の対応に関する規則のリスト

以上のような課題を，執筆者が担当するフランス語初級科目の 4 クラスで実施することで，本研究における分析の対象とするデータを得た。ただし，課題をおこなった 4 クラスの履修生（再履修生を除く）合計 129 名のうち，課題を提出しなかった者が 3 名，提出内容の研究への利用承諾を得られなかった者が 12 名，提出した内容に不備があり統計処理の対象外とした者が 7 名いたため，これらを除外した 107 名の提出内容を統計的分析のためのデータをした。

3.3 手法

3.3.1 データの事前処理

まず，学習者ひとりひとりによる各単語の 1 回目と 2 回目の発音を，授業担当者である執筆者自身が 1 点・2 点・3 点の 3 段階で評価した。以降，この評価点をそれぞれ「1 回目の発音スコア」「2 回目の発音スコア」と呼ぶ。また，学習者による手書きの自己分析も，単語のアルファベットに丸もしくは下線の印があれば 1 点，対応する発音規則のナンバリングの記入があれば 1 点，両方ともがあれば 2 点，どちらもなければ 0 点とし，0 点・1 点・2 点の 3 段階で評価した。以降，この評価点を「自己分析の度合い」と呼ぶ。ちなみに，カ

タカナによる読みかたの記入など，それ以外の記入については，評価の対象外としている。

3.3.2 分析の手順

はじめに，この自律学習プログラムにおいて，1 回目の発音と 2 回目の発音との間にスコアの増加がどれくらいあったのかを確認する。「2 回目の発音スコア」の値から「1 回目の発音スコア」の値を減算することで「スコア増加量」の値を出し，その学習者ごとの平均値をとり，分布を調べると下記の図 3 のようになった。

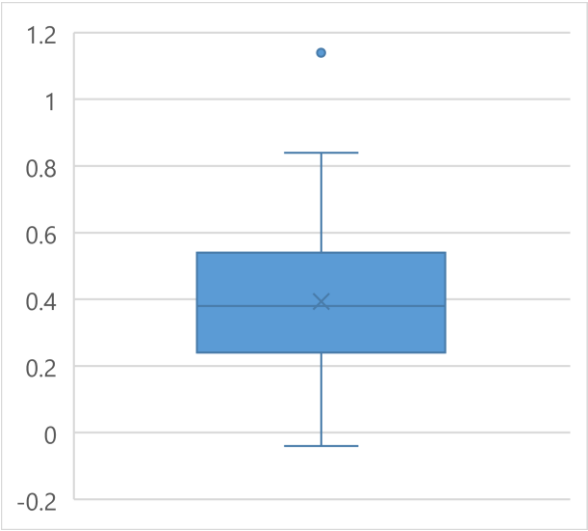


図 3　学習者 107 名の「スコア増加量」平均値の分布

2 回目の平均値の方が 1 回目よりも低くなってしまう学習者が 1 名いたが，それ以外の学習者はスコアの増加を示し，その平均は約 0.4 ポイントとなっている。

続いて，50 単語ごとの「スコア増加量」の平均値をとり，その分布を調べると下記の図 4 のようになった。

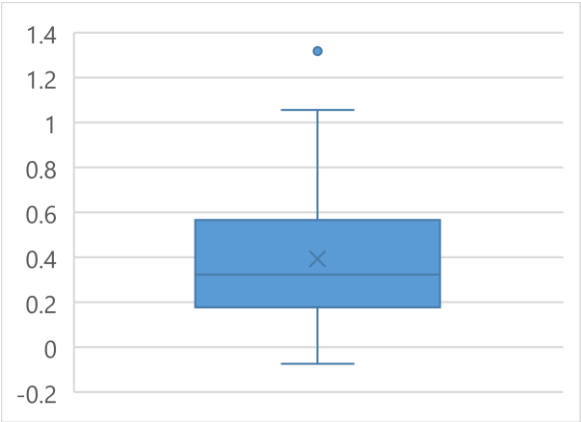


図 4　50 単語の「スコア増加量」平均値の分布

こちらも若干の例外はありつつも，大多数の単語は 1 回目と比べて 2 回目にスコアが増加していることが確認できる。

スコア増加量についてさらに細かく調べるために，各単語ごとの「1 回目の発音スコア」と「スコア増加量」の平均値をグラフにすると，次の図 5 のようになった。各単語は「1 回目の発音スコア」の高い順に並べてあり，「1 回目の発音スコア」が高いほど，2 回目での「スコア増加量」が少ない傾向にあるように見える。

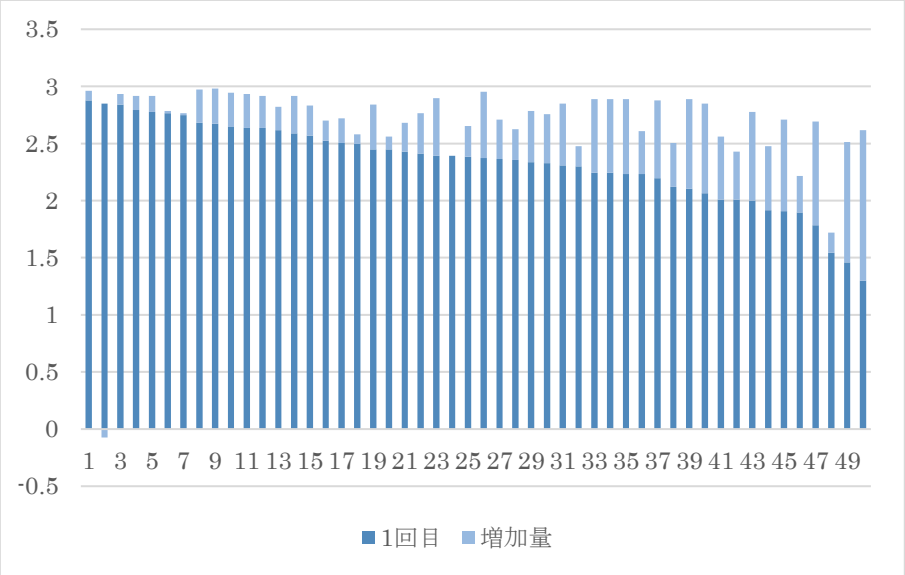


図 5 各単語ごとの「1 回目の発音スコア」と「スコア増加量」の平均値

実際，「1 回目の発音スコア」の平均値が 2.5 以上の単語は，学習者の過半数にとって既に満点の 3 点を獲得していることになり，必然的に 2 回目のスコア上昇が不可能ということになる。今回の分析では，自己分析の度合いとスコアの上昇の関連性を調査するため，2 回目のスコア上昇が期待できる「1 回目の発音スコア」の平均値が 2.5 未満の単語のみを対象として分析をおこなうこととした。データ分析から除外した単語を具体的に示すと，lit, jambe, mer, mot, nom, tête, monde, père, porte, sac, an, pomme, dame, fille, jupe, poste, sport の 17 単語になる。

次に，上記の 17 単語を除いた学習者 107 名による 33 単語の発音について，その「スコアの増加値」と各学習者の「自己分析の度合い」の平均値との間に相関があるかどうかを調査する。まず，Excel のグラフ機能を用いて，2 つの値の分布を視覚化したものが次ページの図 6 となる。このグラフにおいて，各点はひとりひとりの学習者を表し，縦軸が 33 単語の「スコア増加量」の平均値，横軸が 33 単語の「自己分析の度合い」の平均値を示している。

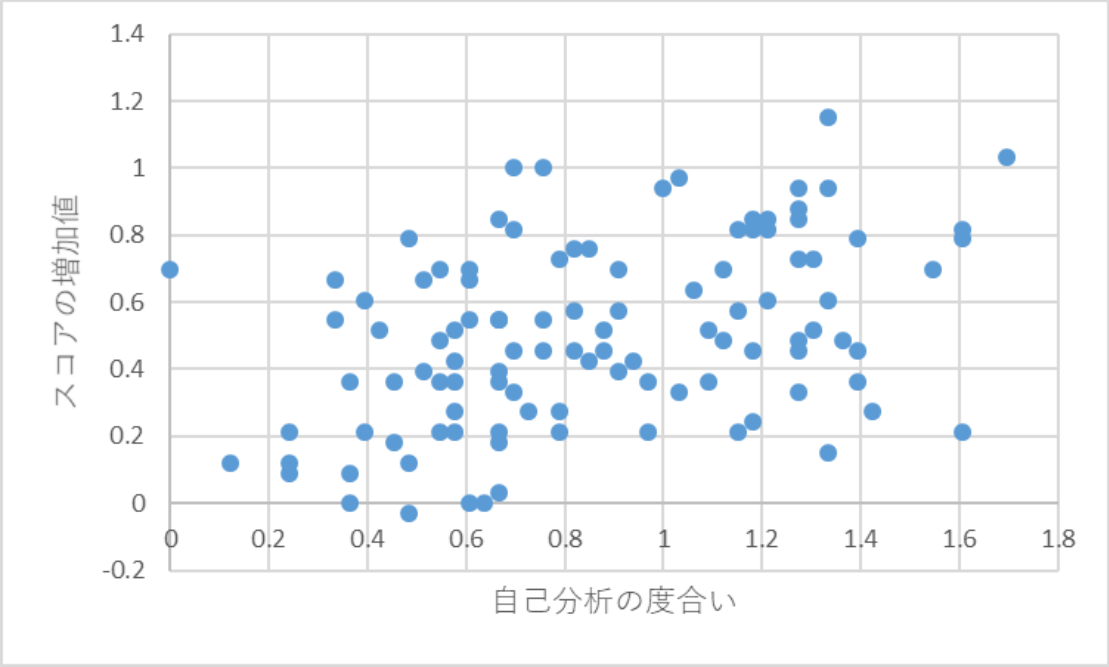


図 5　「スコアの増加量」と「自己分析の度合い」の相関

図 6 のグラフにおいて，2 つの値は正の相関関係をもっているように見えるため，実際にピアソンの積率相関係数を用いて計算をおこなった。計算には Excel2016 の「pearson」関数を，検定の p 値には「tdist」関数を用いた。その結果，2 つの値の間には「0.406」の相関があり，その有意性は「p<0.0001」となった。

4. 結果と考察

まず，本研究で考案したフランス語発音の自律学習プログラムにおいて，「1 回目の発音スコア」と比較して「2 回目の発音スコア」の値が増加していることが明らかになった。そのようなスコアの増加が本当に，今回の自律学習プログラムの設計において重視している学習者の「気づき」によるものなのか，それともただ単に 1 度発音した単語を繰り返し発音したことや，模範音声を聴いたことによるものなのかを判断する必要があるため，本研究においては，その「気づき」が学習者に生じたかどうかを「自己分析の度合い」から見ることとした。その結果，各学習者の「自己分析の度合い」と「スコアの増加量」との間には，ゆるやかではあるが正の相関関係があることが分かった。これによって，必ずしも自己分析が多ければ多いほどスコアが上昇すると証明できるわけではないが，2 つの要素の間に何らかの関連性があることが明らかになった。

5. まとめ

本研究では，フランス語初学者が自身の発音の間違いと正しい規則の適用法に気づくことで，フランス語の綴りと発音の対応関係について学習できるような自律学習プログラムを開発するため

の第一歩として，自律学習プログラムの工程を試作し，その工程のなかで学習者の能動的な自己分析が発音の向上に関与しているのかを調査した。その方法として，学習者がおこなう自己分析と発音スコアの増加との間に相関関係があるかを分析し，約 0.4 のゆるやかな正の相関があることを確認した。ただし，この相関はかならずしも学習者の気づきが発音の向上につながったことを証明するものではないため，今後，分析方法を再検討し改善していくことで，気づきと発音の向上との関連性をより明確にしていく必要があるだろう。

改善の方針としては次の 2 点が考えられる。まず，本研究では分析を容易にするために，学習者ごとのスコアの平均値を用いたが，さらにデータを精査するためには，平均値ではなく，各学習者による各単語の発音スコアを個別に分けて分析することが望ましい。また，データの取り方についても，今回は執筆者のみで 3 段階評価をおこなったが，複数名のフランス語教員で評価することで，より客観的な評価に近づけることが可能になるだろう。

謝辞

本研究は，令和 2 年度神戸大学大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター研究・教育プロジェクト基金（プロジェクト名「遠隔授業におけるフランス語初修者への発音指導法研究」）の助成を受けたものである。ここに感謝の意を表する。

引用文献

阿南婦美代(2006).『コミュニケーションのためのフランス語発音法　発音の規則と練習』駿河台出版社.

井上美穂(2014).「フランス語の発音上達のための発音学習ストラテジー」*Revue japonaise de didactique du français, 9*(1-2), 39-59.

菊地歌子・山根祐佳(2010).『フランス語発音トレーニング』白水社.

菊地歌子(2013a).「母音梯形と母音三角形 —発音指導と評価」『外国語学部紀要』(関西大学)*8*, 23-42.

菊地歌子(2013b).「フランス語の母音：音韻体係の理論と実践」『Rencontres』(関西フランス語教育研究会)*27*, 88-92.

菊地歌子(2014).『フランス語発音指導法入門』関大出版.

清岡智比古(2016). 『《新版》ル・フランセ・クレール』白水社.

ソゼッド，ベルトラン(SAUZEDDE Bertrand)(2014). Difficulté des phonèmes vocaliques du francais auprès des étudiants japonais. *Revue japonaise de didactique du français, 9*(1-2), 97-112.

田口亜紀(2018).「フランス語初学者を対象とした発音指導」『共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要』*24,* 41-51.

余語毅憲(2017).「フランス語の発音の理解をどのように促すか」 *Etudes didactiques du FLE au Japon (Peka, Association des didacticiens japonais), 26,* 10-16.